

平和を念じて

畑中 茂

私は、在学中に徴兵検査を受けたが、その時一緒だった二年先輩のT・Oさんも在学中だったが、海軍航空隊で殉職された旨、墓碑に刻まれているのを後で知った。

私たちは六年在学するところを、戦時中の特例で五年半の九月に繰り上げ卒業した。

卒業前の一か月間は航空隊のエンジン部を作る工場での学徒動員であった。

十月に陸軍に入営することになっていたが、海軍飛行専修予備学生を志願していたので、九月二十一日に入隊のため出発することになった。

昭和十九年の九月二十日が卒業式で、十九日の式の予行には出席したが、二十日は地元のないさつ回りで、父に卒業証書もらいに行ってもらった。慌ただしく二十一日には、近隣の多くの人々の日の丸の旗に送られて土

浦海軍航空隊に入隊したのである。

それから搭乗員になるための基礎教程が始まり、激しい訓練に明け暮れる。

二十年の五月には、滋賀海軍航空隊での実施教程に入る。

六月一日に、入隊して八か月で少尉に任官したが、同じ時に入隊し、同じ訓練を受けて来た同期の者で、少尉候補生になった今は亡き元外務大臣のS・A氏、京都の元副知事、後に国会議員であったY・Y氏も在学中の志願、入隊であった。終戦後大学を卒業されている。滋賀空で一緒だっただけに、感慨深いものがある。

六月に入ってから間もなく健康で視力のよい者は、全員水上特攻の命を受ける。

六月十日に土浦航空隊が空襲を受け同期の者十五名、飛行予科練習生約二七〇名が犠牲となった。少尉に任官して十日目の出来事であった。年齢は二十一、二歳、人生これからという時である。

戦後五十年、減ることはあっても増えることのない同期の会を、毎年、慰霊祭と共に全国大会をやっているが、命がけで過ごした青春時代を思い出している。

私は小学校を昭和十一年に卒業、男子四十九名のうち十四名が二十歳前後で戦死している。毎年八月初旬には同窓会で墓参を恒例行事にしている。今年もその案内状を発送する時期になった。

学業半ばで入隊し、二十歳前後で戦死された方々の思いや、親、兄弟、家族の人達の悲しみを思えば、どんなことがあっても二度と戦争をしてはならない。

戦後五十年経た今日、平和に幸福に過ごすことができる私たちは、あの苦しい、辛い、怖い、恐ろしい、そして悲しい戦争のことを決して忘れてはならない。

私は子や孫たちに、そして後世に平和を強く守らなければならぬと念じる者である。